能登・輪島でくらしと生業を持続させるために

輪島キリモト副代表 桐本順子さん #01

左：桐本順子さん
右上：輪島塗Rescue&Rebornプロジェクトの漆器。奥にあるような古い朱塗りの器が、職人の手で手前のようなモダンなたたずまいの器に生まれ変わる
右下：輪島キリモトの工房の隣地にできた輪島市による輪島塗職人たちの仮設工房。30棟の工房それぞれにはセイコーエプソンの協力による、職人を紹介するタペストリーが掲げられている

4月の初旬に、能登半島の輪島を訪問し、そこで活動する3人の女性に話を聞いた。彼女たちは、それぞれ、能登以外の都会での生活を経て能登・輪島で暮らしていたが、2024年1月1日に起きた令和6年能登半島地震(以下能登半島地震)と9月の豪雨災害を経て、現在も輪島の人々の生業と暮らしをたてなおすために奮闘している。彼女たちの話から、災害によって顕在化する地域の課題と、そこでの女性という立場からの気付きや今後の変化の兆候について考察してみたい。

若い頃の志を思い出した時に地震が来た

輪島キリモト副代表の桐本順子さんは大阪堺市出身、オーストラリア滞在経験による英語を活かして人と人(子どもたち)をつなげるコミュニティづくりをしたいと思っていた。しかし、結婚相手の桐本泰一さんは、輪島塗製造販売の老舗の7代目。伝統の技法に現代のプロダクトデザインを取り入れた木と漆のモノづくりを提案し、2015年に輪島キリモトブランドを立ち上げ、国内外からも注目されている。順子さんは桐本家の嫁として、当然のように家に入り、子育てと家業の事務方として忙しい日々を送ってきた。

子育てが一段落し、若い頃からの志を思い出した順子さんは、観光客が漆と触れ合いながら人と人がつながれる空間をつくろうと、自宅の庭に立つ築60年の茶室を修復し、自宅の一部を「スペースat-home」として整えていた。しかしお披露目をする直前に地震で自宅も茶室も全壊となった。さらに9月の水害で、輪島キリモトの工房や被災した職人さんたちの仮設工房が浸水するという被害にあった(輪島塗は木地、研ぎ、塗りなど数多くの工程があり、それぞれの工程を職人が分業で担う)。

人を癒やす漆器の力を伝える

大変な生活の中で、順子さんは漆器のすばらしさを改めて実感する。地震の後、電気の明かりのない暗い部屋で見た漆の器の美しさはまるで谷崎潤一郎の『陰影礼賛』の世界のようだったという。また、地震でガラスや陶器の器が割れる中、漆器は軽く堅牢で、汚れもつきにくい。柔らかい口当たりや温かみで、人を癒やし、元気にする効果があることもわかった。

そんな中、始まったのが、「能登イタリアンと発酵食の宿ふらっと」を経営するフラットさん夫妻が設立した一般社団法人能登地震地域復興サポート(のとサポ)によって倒壊した家や蔵からレスキューされた古い輪島塗の器(能登の古い家には冠婚葬祭のための輪島塗の膳セットが保存されていることが多い)を、輪島キリモトで新たな器に再生させる「輪島塗Rescue&Rebornプロジェクト」だ。伝統的な朱塗りの器を丁寧に研いで、和紙や布を着せた上で、黒や青のパール漆を塗り重ねることで、まったく新しい風合いの器として生まれ変わる、というもの。

順子さんによれば、このプロジェクトには、地震や豪雨災害で仕事がなくなり心折れた職人さんに再び仕事をつくり、元気になってもらうという意味もあった。実際、このプロジェクトに関わった塗り師さんは、古い器を新たな意匠で蘇らせる仕事をする中で、元気を回復させることができたという。

順子さんは、今後、輪島塗のすばらしさを世界に伝えるため、輪島キリモトに小さな漆ミュージアムをつくりたいという。外から来た人と能登の人を直接つなげる人間コミュニケーションの場にして、都会生活で疲れた人々を癒やしたい。この場所をきっかけに能登全体を楽しい場所にして、出ていった人が戻りたくなる、外からも来たくなる街にしたいと、旅行会社をはじめとする仲間とチームをつくり、取り組んでいこうとしている。

Sachiko Takenouchi

（株）シナリオワークにて女性消費者を中心とする消費者研究、
マーケティング戦略立案を多数手がける。2015年4月、自宅を改装し、
シェアハウス&シェアキッチン『okatteにしおぎ』をオープン。
（株）コンヴィヴィアリテ代表取締役。

NPO法人紡ぎ組副理事長 坂井美香さん

#02

能登移住10年目の災害で全町避難のため尽力

NPO法人紡ぎ組副理事長坂井美香さんは、東京から観光で訪れた能登の自然とくらしに魅了される一方、地域が抱えるさまざまな課題についての相談も受けた。何か提案できるかもしれない、と3年ほど調査。築110年の古民家を借り受けて、理事長の佐藤克己さんと輪島の地域課題を解決するNPO法人を設立した。2019年には、輪島に朝市横丁を開設、バーベキューコーナーなどのほか、子ども縁日を開催した。ふるさと納税の返礼品になっている肉まんの開発や、舳倉（へぐら）島の塩の販売促進等、さまざまな活動で、能登の観光や地域振興の盛り立て役をしてきた。

能登半島地震の際、坂井さんは東京に帰省していた。自宅から避難し車中泊をしていた佐藤さんと連絡を取り、東京で得られる情報を集めて送り、佐藤さんが深見町の住民を説得する形で、1月6日～8日、自衛隊ヘリによる救出を行い、ほぼ全員が二次避難先の粟津温泉に到着、1人のけが人も病人も出さずに済んだという。

実は、坂井さんと佐藤さんは、深見町で10年ほど活動してはいたものの、町の人々との交流はほとんどなかったのだそうだ。高齢者が多く、子どもは1人もいない。他の地域からの移住者はこれまで1人もいなかった。そのような地域に移住者として入ってきた2人はまさによそ者でしかなかったのかもしれない。

このため、佐藤さんが全町避難を呼びかけたときも、まずは「お前誰だ」から始まったそうだ。しかし、坂井さんが連絡を取り、町で最も信頼されている消防団の人に、外部の関係者から「すぐ避難したほうがよい」と電話口でアドバイスしてもらう形でヘリでの避難ができた。その後二次避難先に移動した坂井さん、佐藤さんは深見町復興協議会を立ち上げて町民コミュニティの世話をしたこともあり、紡ぎ組は深見町の人々にも受け入れられるようになった。

能登を「楽しい場所」にすることから始まる

2024年2月17日、廃校となっていた旧深見小学校の校庭に8棟のインスタントハウスと仮設トイレを設置し、数日の宿泊ができる場所を確保した。インスタントハウスには富山や福井の大学生が明るく楽しい絵を描いてくれ、その後、各地の学生や大学関係者との交流が続いている。2024年4月7日には一度みんなで深見に戻ろうと、二次避難所から大型バスをチャーターし、旧深見小学校校庭で花見の会を開催した。ゴールデンウィークには復興食堂を開き、仕事やボランティアで輪島に来ている人のつながりが広がった。

7月には旧深見小学校の教室に段ボールベッドを入れ、山から水を引いて風呂場をつくり、52人が寝泊まりできる宿営所として、のと復興留学の学生や解体業者の受け入れを始めた。9月の豪雨災害で再び断水したが、この間の備えがあったため、宿営所としての業務は続けることができたそうだ。

2025年4月12日、旧深見小学校では「深見町復興祭」として震災から2度目の花見の会が催された。輪島の仮設住宅に入居している町民をマイクロバスで送迎し、食べ物や、子どもたちが思い切り遊ぶ場所も用意し、楽しい一日を過ごした。この日は坂井さんたちが新たに立ち上げた「のと里山里海染め研究所」（能登各地の植物や土、貝などを使った染色で多様な人たちをつなげて生業をつくるプロジェクト）の披露も行われ、桜の枝で染めた布が校庭を彩った。

坂井さんは、輪島や深見町を「楽しい場所」にすることによって、能登内外の人に来てもらえるように、そしてなかなか深見町に戻れない高齢の町民も自分たちが生まれた町でなにか楽しいことが起こることで自分も楽しい気持ちになれるようにと、奔走している。

坂井美香さん

左：旧深見小学校の校庭には学生によってカラフルな絵が描かれたインスタントハウスが立つ。ちょうど桜が満開だった
右：4月12日に催された深見町復興祭のポスター。紡ぎ組の活動についてはFacebookアカウント（https://www.facebook.com/npo.tsumugigumi）で見ることができる

白米千枚田愛耕会広報
堂下真紀子さん

#03

テレビディレクターから能登にUターン

世界農業遺産「能登の里山里海」のシンボルでもある白米（しろよね）千枚田で、輪島市の委託を受け棚田の耕作管理を行う「白米千枚田愛耕会」の広報を担当する堂下真紀子さんは、千枚田の隣の名舟町の出身だ。どこに行っても自分の顔が知られている地元の狭さが嫌で、18歳で京都に進学、その後、金沢でデザインやテレビ局のディレクターの仕事をしていた。千枚田をはじめとする能登の取材をする中で、テレビのニュースにはなりにくい、地味だけれど働き者のおじいちゃんおばあちゃんが地道にこつこつと海や山とともに生きて働いていることで、能登の美しい自然や食が守られているのだということを実感した。そして、そういったくらしを外から伝えるよりも、中に入っていっしょに仕事をしたい、と2020年1月にUターン。愛耕会に入り、千枚田で米をつくる傍ら、ライターやイラストレーターとして地産地消文化情報誌『能登』などの仕事をしてきた。

世界農業遺産としての棚田を真の意味で持続させる

能登半島地震の際は実家におり、その後公民館に避難したが、2日目に夫のいる千枚田に戻り、道の駅で孤立していた観光客らと、炊き出しや水汲みを行ってしのいだ後、13日に金沢に二次避難した。避難前に千枚田の様子を詳しく調べたところ、亀裂がひどく、地滑りを起こしている所もあった。このため、2月に千枚田の修復のため、クラウドファンディングを立ち上げたところ、4月までに1855万円が集まった。その後、避難した愛耕会メンバーやボランティアも加わり、120枚の田んぼに苗を植え、9月には最初の収穫を行うことができた。真紀子さんによれば、ままならない生活の中でも、千枚田に来て土を触り仲間と話せば日常を感じられた。みんなにとって唯一の救いのような場所に思えたという。

しかし、その直後に豪雨災害にあい、修復した田んぼが再び崩れてしまった時には、これまでの努力はなんだったのだろうと、何もかも嫌になってしまい、気持ちをたてなおすのに時間がかかったというが、1か月ほどして、それまでも相談に乗ってくれた方から「また直していきましょう。できることを自分もするので」という電話をもらい、背中を押されたという。豪雨災害で、棚田はゼロどころかマイナスの状態になってしまったが、地震の後ゼロから築いた人間関係は生きていることを実感した。愛耕会の人たちもみんなで頑張ろうと言ってくれ、相談事も以前よりスピーディに話し合えるようになっていた。

2025年春、真紀子さんたち愛耕会は、田んぼの修復と今年の作付け（全体1004枚のうち、250枚程度）に向けて始動している。重機も使って早く田んぼを修復し、以前のような美しい景観を取り戻して観光客を呼ぶ必要があるという経済的な要請もある。一方で世界農業遺産として、昔ながらの手作業で時間をかけて田んぼを修復し、米づくりをしていくことが本来の千枚田のあり方であり、何年かかろうがそのプロセスを見てもらうことに棚田観光の価値があるという考え方を大事にしたい。さらに、愛耕会自体の高齢化や避難の長期化により、実際に田んぼでの作業を担える人が不足するなど、課題は山積している。

真紀子さんは、そうした課題を解決するべく、愛耕会の法人化や、即戦力となる農業経験者（仕事をリタイアした60代の人など）の獲得に向けての広報活動、若手育成の受け皿となる「たな部」（地元の若者でつくる米づくりチーム）の発足など、さまざまな取り組みにトライし、いろいろな壁と戦いつつ、千枚田の価値と魅力を発信していきたいと考えている。

堂下真紀子さん

上：一部重機が入り、復旧工事が行われている白米千枚田の風景。
右：真紀子さんがイラストを含め手書きでつくる「白米千枚田あぜ道便り」。愛耕会の活動はXアカウント（https://x.com/noto_senmaida）でも見ることができる。

日本の課題の先行事例としての能登 #04

移住者の視点から見た能登の魅力

能登・輪島に他地域から移住し、(形は結婚、Uターン、Iターンとさまざまだが)震災、豪雨災害を乗り越えて奮闘している3人の女性にインタビューした。世代も出身地も仕事も三者三様だが、そこには共通点がある。

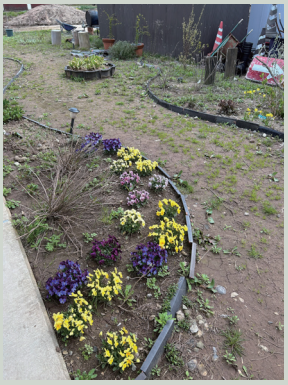
まず、3人とも、能登という地域の自然や生業、暮らしに魅了され、それを外部にも発信したいと考えていること。桐本順子さんは、結婚当初は単なる嫁ぎ先の家業だった輪島の漆器の堅牢さと癒やしを兼ね備えた美しさ、そして、それがさまざまな職人の仕事に支えられていることに子育てや避難生活の中で気付き、それを都会や海外からの観光客に知ってもらう活動を始めた。坂井美香さんは、最初は観光で訪れた能登の海、山の自然の豊かさとその恵みを自分たちの力で活かし、自立して暮らす人々を見て、「ここにはすべてがある」と感じ、暮らしや生業を持続させるための活動を行っている。堂下真紀子さんは、千枚田という財産は、美しい風景だけでなく、長い時間をかけて地域の住人が自分の身体を使って地道に行ってきた農業技術や自然環境との交わりのプロセス、蓄積の結晶だということを知り、それを人々に伝えたいと、愛耕会の広報の仕事をしている。

災害をターニングポイントに

そして、3人とも災害が1つのターニングポイントになり、それ以前にも増して精力的に表に出て仲間づくりを行っているように見受けられる。家業の事務方に専念していた順子さんは震災後、能登で新しいことをする若い人たちとのつながりを広げ、活動の幅を広げようとしている。美香さんは、災害後に支援のために訪れた大学の先生や学生、建築家などと手を組み、能登の若い世代、特に子育て世代をつなげていくためのソフトの活動を立ち上げようとしている。真紀子さんは、震災後のクラウドファンディング立ち上げをいち早く行い、世界農業遺産のシンボルとしての棚田の持続を目指して外部への発信を行うとともに、千枚田の今後について、愛耕会としての発言力を高めることも含めた仲間探しを始めている。

震災以前からの過疎化・高齢化に加え、震災後の避難の長期化により、能登、特に輪島や珠洲などの奥能登の課題は山積している。高齢の住人は避難先から地元に戻ることさえむずかしいという。これを機に、コンパクトシティ化を進めようという動きもあるというが、そうなれば、これまで続いてきた能登の豊かなくらしや生業、文化が失われてしまう恐れもある。観光の復活といっても、形だけを復活させても、地域の暮らしや生業がなりたっていなければ、それはテーマパークでしかない。

そうした危機感の中で、3人のインタビューからは、近代的なパワーで復興を急ぐだけではなく、住人の日々のくらしをどう復活させ持続させていくのかという視点からの緩やかで細やかな復興というテーマが浮き彫りになっているようにも思われる。また、災害によって従来の力関係や構造が崩れ、それまで光の当たらなかった人や考え方が前に出て、ある種の社会実験のチャンスになっている点も興味深い。今回話を聞いた女性たちは、未来の子どもたちに能登を誇りに思ってもらえるようにしたい。そのためには自分たちがとにかく楽しいことをつくっていく必要がある、と言っている。能登が抱える課題は、ある意味、これからの日本全体にとっての課題の先行事例としても注目される。



左：順子さんは輪島キリモト本店の仮設店舗横の空き地に、地元のグループと共に、観光客や地元の人が集い、子どもが遊べる癒やしの庭をつくっている
右：美香さんは、のと里山里海染め研究所の活動として、2025年5月、ボランティアの大学生と地元の植物を使って布を染めるワークショップを行った

上：真紀子さんが所属する愛耕会は、千枚田のクラウドファンディングのプロジェクト完了予定日を当初の2025年3月31日から2029年3月31日に延長し、事業を長期的に行っていこうとしている。https://readyfor.jp/projects/138190/announcements/371379